



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか : 北海道の古生物系ミュージアムにおける脊椎動物化石発見と研究に注目して
Author(s)	田中, 嘉寛
Citation	今金地域研究, 7, 1-14
Issue Date	2026-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99171
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	imagane_7.pdf



ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか ー北海道の古生物系ミュージアムにおける脊椎動物化石発見と研究に注目してー

How researchers contributed to the creation of elements for establishing museums— focusing on the
discovery and study of vertebrate fossils in paleontology-focused museums in Hokkaido, Japan

田中嘉寛*

Yoshihiro Tanaka

Abstract. Museums are not something that simply exist by default. Their establishments involve various elements such as vision and planning, budgeting and location, collections and research—but all of these are assembled as a result of “human actions”. To clarify how researchers contributed to the creation of elements essential to museum establishment, this study examines 13 paleontology-focused museums in Hokkaido, analyzing the relationship between fossil discoveries, research publication timing, and museum establishment. Museums were categorized into three types: (1) those established before fossil research was published, (2) those established after, and (3) those not directly linked to fossil discoveries. The findings highlight the critical role of researchers not only in scientific work but also in initiating museum projects, engaging with local communities, and shaping visions for museum development before scientific papers were published. Researchers contributed through fossil identification, excavation, preservation, and public outreach, often forming collaborative teams and influencing municipal decisions. The study emphasizes that museum creation is not automatic—it requires coordinated efforts, vision, and advocacy, especially before formal research results are available.

Key words : Museology, Museum management, establishing museums, research

1 本調査の目的と北海道の古生物系ミュージアム

ミュージアムの年報などで入館者数や活動の活発さについてある程度わかるが、内実は外からわかりにくい。「活動が実質的にストップしている状態でも、外目には運営できているように見える」、開館して赤字さえ出していなければ運営できていると思われてしまう(篠田 2024)。そのようなわかりにくさのある中で、修繕や移設などと異なり、これまでなかった施設が新たに生まれる瞬間は、ミュージアムのあり方のなかで過去とは異なる段階へ移行したことをはっきりと認識できる数少ない瞬間であり、ミュージアムを調査する上で貴重な示唆を与えてくれる出来事である。ミュージアムはあってあたりまえではない。ミュージアムの創立にはビジョンや計画の作成、予算や場、収蔵資料や研究といった様々な要素があるが、これらは「人」の行動の結果として揃えてい

くものである。

ところで、日本博物館協会はほぼ5年ごとに日本の博物館の実情を把握するとともに課題を整理し、経年変化を明らかにすることを目的に、広範囲の博物館を対象としたアンケート調査を実施し、直近では『令和元年度 日本の博物館総合調査報告書』をまとめた(日本博物館協会 2020)。この調査は55.7%と同種の社会調査と比較して回答率が高く、博物館の運営に関する課題を体系的にみた、最近の調査と捉えることができる。その結果からは「人」に関する課題として、職員体制が改善されない、職員数が不足(73.9%)、学芸系職員の力量が発揮できていない(52.5%)、調査研究が進んでいない(72%)などが挙げられた。筆者は古生物学を専門とし、現場に10年ほど学芸員としてたずさわりの、現在、北海道札幌市の博物館計画に関わっている。上記のように博物館界の

* 札幌市博物館活動センター Sapporo City Museum Activity Center,
北海道大学総合博物館 Hokkaido University Museum, 沼田町化石館 Numata Fossil Museum

課題として捉えられている「研究」、そして「交流活動」や「資料活動」といった博物館主要機能を有機的に行うことで、ミュージアムの活動を効果的に行うことができると考えて、日々実践を行っている。

そこで「ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか」調査した。調査対象として北海道における古生物の展示をもつミュージアムを2つの理由から選んだ。まず、北海道からは1970年代より多数の化石が発見されるようになった。そして、それぞれの地域に、化石の展示をもつ博物館、あるいは化石に特化した博物館の設立が相次いだ地域であるためだ。本稿では両者を合わせて古生物系ミュージアムとよぶ。中には足寄動物化石博物館や沼田町化石館のように化石の発見が博物館設立の契機となっているケースが見られる。化石を地域独自の文化資産としてミュージアムなどで展示するなど活用を意識している、という点で調査対象として興味深い。2つ目の理由として筆者自身、協力関係や共同研究を含めると北海道大学総合博物館、足寄動物化石博物館、むかわ町穂別博物館、深川市郷土資料館、ピリカ旧石器文化館などと連携があり、沼田町化石館と札幌市博物館活動センターで勤務し、様々なミュージアムの設立の経緯や運営の内情、関わった人々の人となりなど、出版物では知ることのできない事柄を知る機会があったためだ。

本調査では前述のとおり「ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか」明らかにすることを目的として、特に「ミュージアムの設立」「脊椎動物化石」「研究者」同士の関わりについて調査した。なお、博物館のあり方は、登録博物館、博物館類似施設といった法上のあり方だけでなく、博物館主要機能の相対的な軽重など在于方は実に多様である。本稿ではあくまでも脊椎動物化石と研究者との関わりに注目し、一括してミュージアムとして扱う。

2 調査方法

北海道の脊椎動物化石の古生物系ミュージアムのうち、ある程度資料が存在するために調査可能な13館をオープンした順にとりあげる。北海道博物館、三笠市立博物館、むかわ町穂別博物館、滝川市美術自然史館、忠類ナウマン象記念館、深川市郷土資料館、足寄動物化石博物館、沼田町化石館、北海道大学総合博物館、札幌市博物館活動センター、中川町エコミュージアムセンター、ピリカ旧石器文化館、北広島エコミュージアムセンター（全て現行の名称）。

上記13館の設立の契機となる化石の発見の有無、その研究成果発表時期、そしてミュージアム設立や計画の時期を重点的に調査し、ミュージアムごとに年表にまとめた（表1-13）。情報収集は各館や学芸員の刊行物などを参考に調査を行った。札幌市などいくつかのミュージアムについては調査の範囲を広げて所管する自治体の出版物なども用いてより精緻にあらましを記述するようにした。最後に、年表の事項同士の関係性に基づいてミュージアムのタイプ分けを行い、化石と研究者とミュージアム設立の関わりについて考察した。

3 結果 脊椎動物化石発見とミュージアムの設立

ここでは、ミュージアムごとの歴史的背景として所管自治体のもつ背景、脊椎動物化石の発見と研究、ミュージアムの建設経緯と設置目的を整理した。所管自治体の背景は、特別に引用がなければ2025年1月6日に参照したオンライン事典『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』から引用した。

(1) 北海道博物館（表1）

ミュージアムの所在地は札幌市、所管は北海道。北海道は古くから蝦夷地とよばれ、アイヌの居住地だった。1869年に北海道と改称。1872年から屯田兵などによって開拓がすすめられた。

北海道博物館に関わる古生物としては、忠類へのナウマンゾウ化石発掘が1969年にあった（忠類ナウマンゾウ記念館の項目で述べる）。北海道博物館にはほか、札幌市からみつかったヒゲクジ

ラ化石や、北広島市からみつかったカイギュウなどの化石も収蔵されている。

北海道開拓記念館は、北海道百年記念事業の一つとして、野幌森林公園、百年記念館とともに1971年に建設された（北海道開拓記念館 1971）。その目的は、北海道開拓記念館条例第1条にある「北海道百年を記念して、北海道の歴史に対する認識を深めるため」としている。当初はメモリアルホールにちかいものを想定していたが、北海道における人類の歴史を中心にした博物館へと方針を修正し、1968年から1970年にかけて常設展に必要な展示物の収集が行われた（矢島 1996）。

北海道開拓記念館時代の目的は「北海道の生い立ち、開拓の足跡を示す資料を収集、保存し、展示して北海道の歴史と未来への課題や可能性の認識に役立てるとともに、今後、道内におけるこの種の施設のセンターとしての役割を果たし、北海道の開発に寄与せしめる」とされていた（北海道 2010）。北海道博物館は2015年に北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターが統合され、北海道を代表する「総合」博物館としてリニューアルオープンした。北海道博物館の社会的使命は北海道の自然や文化を未来につたえ、北海道の中核博物館としてネットワークを構築することなどが挙げられている（北海道博物館 2016）。

表1 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	北海道博物館（北海道開拓記念館）・北海道
開館	1971年
経緯	1872年 屯田兵などによる開拓 1967年 『北海道開拓記念館構想』
その後	2015年 北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターが統合され、北海道博物館オープン
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

(2) 三笠市立博物館（表2）

所管および所在の自治体は三笠市。1879年に道内最初の幌内炭鉱が開かれ、その後、次々と炭鉱開発がおこり集落が発達。1971年から炭鉱閉山が続き、人口が急減。

三笠市は脊椎動物だけでなく、アンモナイトの産地としても有名である。1972年に北海道三笠高等学校が2万点ちかい化石を寄贈し、そのころさらに別の寄贈があり、化石整理を地元の化石コレクターに委託した（三笠市立博物館 1999）。

1976年にエゾミカサリュウが見つかり、1977年に天然記念物として指定された。当初は肉食恐竜だと考えられていたが、2008年に海棲爬虫類の新種タニファサウルス・ミカセンシス *Taniwasaurus mikasaensis* として命名された（Caldwell et al. 2008）。

1975年に郷土資料室を開設し、上記のエゾミカサリュウの発見、天然記念物指定の直後、1979年に三笠市立博物館が開館した（三笠市立博物館 1999）。三笠市立博物館条例、施行規則の「事業」のなかで資料収集保管、展示、研究、出版物作成、収蔵資料に関する講演会の実施、他の博物館と標本の貸し借りや情報の交換を行うとしている（三笠市立博物館 1999）。

表2 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	三笠市立博物館・三笠市
開館	1979年
経緯	1970年代 化石が大量に寄贈された時期 1975年 郷土資料室開設
その後	開館後、郷土資料室は廃止
設立の契機となる単一の標本	エゾミカサリュウ
その発見	1976年
その発表	2008年

(3) むかわ町穂別博物館（表3）

所管および所在の自治体はむかわ町。鷗川の中流から下流付近は田園地帯で米を産し、沿岸域では漁業も盛んで、鷗川を遡上するシシャモが特産。

首長竜類のホベツアラキリュウが1975年に発見され、1977年発掘された（西村 2024）。ホベツアラキリュウは1989年にエラスモサウルス類属種不明として記載論文が発表された（Nakaya 1989）。2017年に北海道指定の文化財となった（むかわ町穂別博物館 2021）。

その後、2003年に発見された標本が、北海道大学総合博物館の小林快次博士のグループによる調査、追加の化石発掘がおこなわれ、国立科学博物館で開催された「恐竜博2019」の会期中にカムイサウルス・ジャポニクス *Kamuisaurus japonicus* と命名された（Kobayashi et al. 2019; 西村 2024）。

むかわ町穂別博物館の前身である（旧）穂別町立博物館は、ホベツアラキリュウを地元に残し、保管・展示することを主な目的として、1980年に建設計画検討委員会が発足し、1982年に開館した（むかわ町穂別博物館 2021）。2006年に鶴川町、穂別町が合併し、むかわ町穂別博物館に名称が変わった。当初は化石だけでなく民具など人文系資料も展示されていたが、1992年に観光施設「穂別地球体験館」がオープンするにあわせて展示更新を行い、古生物に特化した博物館となった（西村 2024）。

表3 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	むかわ町穂別博物館・穂別町（現・むかわ町）
開館	1982年 穂別町立博物館
経緯	1980年 『穂別町郷土資料館建設計画検討委員会』発足
	1981年 穂別町立博物館に名称を変更
その後	2006年 鶴川、穂別が合併しむかわ町穂別博物館に名称変更
	2019年 カムイサウルス・ジャポニクス発表
	新しい博物館建設計画が進行中
設立の契機となる単一の標本	ホベツアラキリュウ
その発見	1975年
その発表	1989年

(4) 滝川市美術自然史館（表4）

所管および所在の自治体は滝川市。石狩川と空知川の合流点で、石狩平野北部の商業都市。1889年に屯田兵により開拓。

1980年8月に空知川でタキカワカイギュウが発見された（古沢 1982）。発見当時、テレビで報道され、北海道新聞が選ぶその年の10大ニュースに選ばれたほど話題となった（滝川市美術自然史館 2000）。その後、タキカワカイギュウのクリーニングと研究が地元で行われ（木村 2017）、1984年に北海道の天然記念物に指定され、1988年に新種として発表された（Furusawa 1988）。

美術自然史館が設立される以前には、郷土館があった。滝川市郷土館は1970年に開基85周年、そして滝川市と江部乙町の合併5周年、また終戦30年記念事業として1972年に開館した。滝川市郷土館の研究年報1号によると、タキカワカイギュウの発見は郷土館に自然史の特色を加えたきっかけとなった。1983年に『滝川市郷土美術館建設基本構想』が出版され、海牛化石の展示を含めて滝川市美術自然史館が1986年にオープンした。

滝川市郷土館の目的は、地元の歴史をたずね、郷土愛を培い、未来を想像することとされた（滝川市郷土館 1983）。また、滝川市美術自然史館はタキカワカイギュウの保存を目的としていたことが、タキカワカイギュウ研究の解説書内で滝川市長によって紹介されている（古沢 1989）。

表4 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	滝川市美術自然史館・滝川市
開館	1986年
経緯	1970年 滝川市郷土館開館
	1982年 北海道博覧会でタキカワカイギュウのレプリカを展示
	1984年 タキカワカイギュウが道の天然記念物に
設立の契機となる単一の標本	タキカワカイギュウ
その発見	1980年
その発表	1988年

(5) 忠類ナウマン象記念館（表 5）

所管および所在の自治体は幕別町。幕別町は 2006 年に忠類村を編入した。十勝平野の町で畑作、酪農がさかん。

忠類ナウマン象化石は 1969 年 7 月に農道工事現場でほぼ 1 頭分の化石骨が 46 点発見、発掘された（幕別町教育委員会 2025）。その後、追加調査によって 1970 年に発見された化石の中にマンモスゾウの臼歯も 1 点含まれていたことが判明し、北海道初となるナウマンゾウの足跡化石も発見された。1978 年に亀井節夫博士（京都大学）が論文集『十勝平野』のなかでナウマンゾウの産状についての論文を発表した。

忠類ナウマン象記念館は、忠類でナウマン象の化石が発見されたことを記念して 1988 年に建てられた（添田 2024; 幕別町教育委員会 2025）。2020 年ごろから町としては初となる学芸員が 1 名採用され、古生物学の研究を行っている（木村 2023; 添田 2024）。

ミュージアムの設置目的について所管する教育委員会のホームページには、ナウマンゾウの発見から発掘までの感動をパネルや映像、復元模型等を用いて紹介している、としている（幕別町教育委員会 2025）。

表 5 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	忠類ナウマン象記念館・忠類村（現・幕別町）
開館	1988 年
経緯	-
その後	2024 年にリニューアル
設立の契機となる単一の標本	ナウマンゾウ
その発見	1969 年
その発表	1978 年

(6) 深川市郷土資料館（表 6）

所管および所在の自治体は深川市。1895 年ごろから屯田兵による開拓が進められた。

1978 年にフカガワクジラが発見され、1982 年にセミクジラの一つであるという報告書が出版

された（フカガワクジラ発掘調査団 1982）。2020 年にセミクジラ科の新属新種アーケオベリーナ・ドサンコ *Archaeobalaena dosanko* と命名された（Tanaka et al. 2020）。

深川市郷土資料館は 1992 年に多目的文化施設の中に収蔵庫とともに設置された（深川市教育委員会 2017）。フカガワクジラの展示は重要な扱いではあるが、郷土資料館の展示は主に明治時代の史料や音江の環状列石とあるため（深川市教育委員会 2023）、筆者はフカガワクジラを深川市郷土資料館の設立の契機となる標本として捉えなかった。

表 6 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	深川市郷土資料館・深川市
開館	1992 年
経緯	1978 年にフカガワクジラ発見
その後	2020 年 フカガワクジラ新属新種発表
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

(7) 足寄動物化石博物館（表 7）

所管および所在の自治体は足寄町。林業と農業が主要産業で、穀類や豆の栽培、酪農と畜産が行われる。

足寄における脊椎動物化石の発見と研究、博物館計画については、1976 年の化石発見から 1998 年の開館まで澤村（2001）で、開館後の 1998 年から 2018 年までは澤村（2021）に詳しくまとめられており、引用がない場合はそれらに基づいて記述する。

足寄において新種になったもののうち、最初に発見された化石は 1976 年に地質調査中の研究者によって発見されたアショロア *Ashoroa laticosta* であった。1980 年代にも重要な化石の発見が相次ぎ、これらは地元の方々による発見である。1989 年に『足寄動物化石群研究の記録』が教育委員会によって出版され、調査の進捗が記録された。足寄町の名を冠したアショロアが新属新種として発表されたのは 2000 年であった（Inuzuka

2000; 澤村 2021)。足寄動物化石博物館設立の契機となった標本は束柱類のアショロアだけでなく新種となったベヘモトプス、そして鯨類化石も含まれ(澤村 2001)、アショロカズハヒゲクジラなど4種のヒゲクジラ類の新種が1995年に発表された(Barnes et al. 1995)。これらの化石は1981年から1990年にかけて発見されたもので、いずれも開館前に発見、発表された。

ミュージアムの設立を含めた経緯は、1976年に化石の発見、1984年に足寄町教育委員会が化石作業所を開設、1991年に学芸員を採用し、1994年に『足寄動物化石博物館（仮称）設立基本構想』を策定、1998年に開館した。2010年からは指定管理者制度を導入した。2014年には子どもにわかりやすくすることを狙って展示更新を行った。その際、同館学芸員が作成した古生物復元画がふんだんに使われた展示となった。

1994年の『足寄動物化石博物館（仮称）設立基本構想』における目的は、足寄動物化石群を保管、管理、収集、研究し、研究成果を公開し、町の財産として活用することとされている(澤村 2021)。

表7 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	足寄動物化石博物館
設立の契機となる単一の標本	アショロア、アショロカズハヒゲクジラなど
発見	1976年（アショロア）1990年（アショロカズハヒゲクジラ）
発表	2000年（アショロア）1995年（アショロカズハヒゲクジラ）
経緯	1984年化石作業所開設
	1989年『足寄動物化石群研究の記録』出版
	1990年町民による事業検討委員会
	1991年学芸員採用
	1994年『足寄動物化石博物館（仮称）設立基本構想』
開館	1998年
その後	2010年指定管理者制度

(8) 沼田町化石館（表8）

所管および所在の自治体は沼田町。町名は最初に移住した富山県の沼田喜三郎に由来する。かつて炭鉱が栄えたが、現在は農業が主産業。

沼田町におけるミュージアム設立のきっかけとなったヌマタネズミイルカは、1985年6月に山下茂教諭が幌新太刀別川で発見し、7月に発掘、研究が始められ(沼田化石研究会 1991)、2000年にヌマタネズミイルカ *Numataphocoena yamashitai* と命名された(Ichishima & Kimura 2000)。

1985年9月には沼田歯クジラ会が山下教諭らの呼びかけで創設され、1987年に歯クジラ会は沼田化石研究会に改称した。1988年に沼田町化石展示学習基本構想がまとまり、1989年から展示がスタートした。1991年の化石研究会記念誌には、会が数度にわたり沼田町に博物館建設の要望を出したことが記されている(沼田化石研究会 1991)。1992年に町は自然史研究室を開設し学芸員を配置して博物館開館準備を始めた。1999年に既存の建物を利用した沼田町化石館が市街地に開館した(沼田町化石館 2000)。2008年には山あいの幌新地区の既存施設を利用した展示施設「沼田町化石体験館」がオープンした。

ミュージアムの前身となる沼田化石研究会の目的は「社会教育事業として沼田産化石に関する認識を深め、町民の学術及び文化の発展に寄与すること」としている(沼田化石研究会 1991)。沼田町化石館の目的は「地元産の化石を町民に理解しやすく公開し、町民と一体化した普及活動にあたる」こととしていた(沼田町化石館 2001)。

表8 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	沼田町化石館・沼田町
開館	1999年
経緯	1989年 展示を開始
	1990年ごろ 博物館建設の提案が化石研究会から出される
	1995年 『地域環境博物館構想』
その後	2008年 化石体験館開館

設立の契機となる単一の標本	スマタネズミイルカ
その発見	1985 年
その発表	2000 年

(9) 北海道大学総合博物館（表 9）

所在地は札幌市。所管する北海道大学の背景について、北海道大学総合博物館年報の沿革に基づいてまとめる（北海道大学総合博物館 2023）。北海道大学の前身である札幌農学校は 1876 年に開校した。札幌農学校開校以来 150 年になる研究成果として、現在 400 万点を超す学術標本が学内に所蔵され、その中には 1 万 3 千点以上の貴重なタイプ標本が含まれている。

ミュージアム構想以前の脊椎動物化石の発見、発掘としては 1930 年代にサハリン（当時の樺太）で発見されたニッポノサウルスやデスモスチルスがある（越前谷ほか 2017）。昨今、話題になっているむかわ町から発見されたカムイサウルスの研究も当博物館で行われた（Kobayashi et al. 2019）。

1966 年から総合博物館設置が検討され、2001 年に公開展示が開始され、2016 年のリニューアルで北海道大学 12 学部を紹介する展示を新設した。

北海道大学総合博物館の使命は「学術標本の保管・整理、次世代への継承と情報の提供、学術資料を用いた学際的研究分野の開拓、展示・セミナー等を通じた教育普及活動、博物館文化の創造と発信」とされている。

表 9 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	北海道大学総合博物館・北海道大学
開館	1999 年
経緯	1876 年 札幌農学校開校 1884 年 開拓使より博物館を譲り受け、付属博物館実現
その後	2001 年 展示公開開始 2016 年 リニューアル
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

(10) 札幌市博物館活動センター（表 10）

所管および所在の自治体は札幌市。1922 年に札幌市制が施行され、1970 年に人口 100 万人を超え、1972 年に政令指定都市に移行した。2009 年から人口は自然減少。

表 10 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	札幌市博物館活動センター・札幌市
開館	2001 年
経緯	1986 年 教育委員会で自然史系博物館の検討を開始 1993 年 市民から博物館建設の提言 1996 年 『札幌市博物館基本構想』 1998 年 財政改革推進計画に伴い、施設建設凍結 2001 年 『札幌市博物館計画推進方針』
その後	2002 年 サッポロカイギュウ発見 2007 年 サッポロカイギュウ報告書 2008 年 サッポロクジラ発見 2012 年 市民と有識者による次世代型博物館計画検討委員会発足 2015 年 『(仮称) 札幌博物館基本計画』 2016 年 札幌市博物館活動センター移転 2019 年 『(仮称) 札幌博物館展示・事業基本計画』
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

札幌市からはサッポロカイギュウとサッポロクジラが発見されている。サッポロカイギュウは 2002 年に肋骨や胸骨などが発見され、市民向けの成果報告会を実施し、報告書が出版された（札幌市博物館活動センター 2007）。サッポロカイギュウは札幌市から初めて見つかった大型脊椎動物化石であり、カイギュウの巨大化に関して重要な標本であると考えられている（古沢 2013）。2008

年に発見された札幌市産のサッポロクジラの化石は頭蓋骨、下顎、脊椎骨、前肢などから成り、世界的にみても多くの部位が保存されているセミクジラ科化石といえる。2025 年 8 月に新属新種の *Megabalaena sapporoensis* として命名された (Tanaka et al. 2025)。

札幌市では自然史系博物館の計画を推進している。田中 (2024) は札幌市における博物館計画の経緯を 3 期に分けた。第 1 期における建設計画は 1991 年のバブル経済の崩壊によって札幌市財政も税収の落ち込みや累積債務の増加が大きくなり、先送りされた。第 2 期では学芸員が着任し、それまで行っていた資料収集に加えて、普及活動と展示を実施し始めた。第 3 期の 2011 年に第 3 次札幌新まちづくり計画がはじまり、その政策目標「市民が創る自治と文化の街」の一つとして「次世代型博物館の検討」がはじまり (札幌市 2011)、これまでの博物館活動をふまえて新しい博物館計画を策定することとなり現在に至る。

札幌市の博物館には「市民が郷土の自然・歴史・文化についてより深く学び、札幌を訪れた方にその魅力を十分に伝える場」としての役割が求められている (札幌市 2019)。

(11) 中川エコミュージアムセンター (表 11)

所管および所在の自治体は中川町。北海道北部の山地で林業がさかん。

中川町からはクビナガリュウが 1973 年と 1991 年に、また恐竜も見つかっており (疋田・早坂 2005)。2006 年に概要が報告された (望月ほか 2006)。

中川エコミュージアムセンターは町全体をミュージアムとして捉えたときの中心施設で、展示、収蔵、研究機能を持っている。中川エコミュージアムセンターの創設以前から中川町郷土資料館があり、地域調査などの活動をおこなっていた。1997 年には化石の里づくり推進室が設置され、1998 年には『第 4 次中川町総合計画』の 3 大プロジェクトの一つとして「化石の里開花プロジェクト」の推進が決定された。1998 年から郷土資料館は紀要「自然誌の研究」を創刊し、自然、文

化、生活の財産を町内に見出し、化石以外の中川の魅力を包括的に地域の魅力として捉えてまちづくりを行う方針が 1999 年に『中川エコミュージアム構想』としてまとめられた。2002 年に廃校を利用した展示、宿泊施設がオープンした。

中川エコミュージアムセンターは、学術情報発信の場、学びと交流の場、地域住民のまちづくり参画の場として設置された (疋田・早坂 2005)。

表 11 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	中川町エコミュージアムセンター・中川町
開館	2002 年
経緯	中川町郷土資料館
	1997 年 化石の里づくり推進室設置
	1998 年 『第 4 次中川町総合計画』の 3 大プロジェクトの一つとして「化石の里開花プロジェクト」の推進が決定
	1999 年 『中川エコミュージアム構想』
設立の契機となる単一の標本	クビナガリュウ
その発見	1973 年
その発表	2006 年

(12) ピリカ旧石器文化館 (表 12)

所管および所在の自治体は今金町。渡島半島にある町で 1947 年に利別村を改称して町となった。農業、酪農、木材産業がある。ピリカ遺跡は史跡に指定されている。

ピリカカイギュウは 1983 年に発見、1984 年に発掘、1992 年に報告書にまとめられた (美利河海牛化石調査研究会・北海道今金町教育委員会 1992)。

1989 年には博物館建設構想委員会の設置、1986 年に人文と自然の学芸員がそれぞれ採用され、1993 年から建設準備委員会、同年からは博物館建設準備室がスタートした (糸魚川 1995) が、1996 年度に諸般の事情により博物館建設については中断せざるを得なくなったとされ、遺跡の整備の推進が進められた (北海道今金町 2003)。2003 年にピリカ旧石器文化館が、2006 年に今金

町文化財保管・活用庫が設置された。今金町のホームページによるとピリカカイギュウは文化財保管・活用庫に収蔵されている。2022年に新たに『今金町文化財保存活用地域計画』が策定され、「文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる」ことを目標に10年間で24の事業を展開することが示された（北海道今金町 2022）。

ピリカ旧石器文化館の目的は、展示や普及活動を通して国指定史跡ピリカ遺跡を貴重な文化遺産として後世に伝えることとピリカ旧石器文化館ホームページで述べられている。

表 12 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	ピリカ旧石器文化館・今金町
開館	2003 年
経緯	1980 年 博物館設立計画
	1989 年 博物館建設構想委員会
	1993 年 博物館準備室スタート
	1996 年 博物館計画中断
その後	2006 年 今金町文化財保管・活用庫
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

(13) 北広島エコミュージアムセンター（表 13）

所管および所在の自治体は北広島市。1884年に広島県の人々が移住し、1996年に市制施行にともない北広島市に改称。隣接する札幌市の発展に伴って、大学や工場がふえて、住宅団地がつけられ都市化がすすんだ。

キタヒロシマカイギュウは1971年に発見され、2010年に市指定の文化財となった（北広島市教育委員会 2014）。ほかセイウチ、ケナガマンモスなどが発見されている。

2010年に『北広島市エコミュージアム構想』が策定され（北広島市教育委員会 2010）、2014年にオープンした。

ミュージアムで配布しているパンフレットによ

ると、北広島市の豊かな自然や歴史、産業について情報の収集や発信、展示などの役割を担う「屋根のない博物館（＝エコミュージアム）」の拠点施設で、「温故知新」の精神を今に伝え、エコミュージアムを推進するコア施設としてオープンしたと記されている。

表 13 ミュージアムの設立の経緯と設立の契機となる化石の発見の有無

ミュージアム名・設置主体	北広島エコミュージアムセンター・北広島市
開館	2014 年
経緯	2010 年 『北広島エコミュージアム構想』
設立の契機となる単一の標本	-
その発見	-
その発表	-

4 考察

ここでは、各ミュージアムを2つの視点で比較する。まず、上記調査で整理した情報に基づいてミュージアム設立と、設立の契機となった標本の研究発表との時期に基づいてミュージアム設立に対する研究発表の影響を考察する。次に、脊椎動物化石が設立に大きく関わったミュージアムに絞って、ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたかを考察する。

(1) ミュージアム設立のタイプ

設立の契機となる化石の発見の有無、その研究成果発表時期、そして博物館設立や計画の時期に基づいて以下の3タイプ（タイプ1：設立が先で研究発表が後のミュージアム、タイプ2：研究発表が先で設立が後のミュージアム、タイプ3：化石が直接開館の契機ではないミュージアム）に分類した（表 14）。

タイプ1「ミュージアム設立の契機となった化石があり、設立が先で、研究発表が後のミュージアム」は時系列の関係上、研究発表が直接ミュージアムの設立に結びついていないが、論文出版以

前、すなわち研究中の段階において、すでに設立の契機となる標本の重要性が明らかになり、ミュージアム設立への機運が高まっていった可能性がある。それは次の項目で述べる。

表 14 設立の契機となる化石の発見の有無、その研究成果発表時期、そして博物館設立や計画の時期に基づく北海道古生物系ミュージアムの分類

ミュージアム名称	設立の契機となった単一の化石	研究発表	分類
穂別町立博物館	あり	開館の後	タイプ 1
三笠市立博物館	あり	開館の後	タイプ 1
中川エコミュージアムセンター	あり	開館の後	タイプ 1
沼田町化石館	あり	開館の後	タイプ 1
滝川市美術自然史館	あり	開館の前	タイプ 2
忠類ナウマン象記念館	あり	開館の前	タイプ 2
足寄動物化石博物館	あり（複数）	開館の前後	タイプ 2
札幌市博物館活動センター	なし	-	タイプ 3
滝川郷土館	なし	-	タイプ 3
深川市郷土資料館	なし	-	タイプ 3
ピリカ旧石器文化館	なし	-	タイプ 3
北海道博物館（北海道開拓記念館）	なし	-	タイプ 3
北海道大学総合博物館	なし	-	タイプ 3
北広島エコミュージアムセンター	なし	-	タイプ 3

タイプ 2「ミュージアム設立の契機となった化石があり、研究発表が先で、設立が後のミュージアム」は研究発表の後オープンした。滝川郷土館は滝川市美術自然史館の前身で、タキカワカイギュウ化石が発見される以前に設立されたミュージアムであり、タキカワカイギュウの発見によってミュージアムのあり方が変わった例として興味深い。足寄動物化石博物館の開館は 1998 年でアショロアとクジラ化石 4 種が新種として開館前後に発表された。つまり、足寄動物化石博物館の場合、ミュージアム設立の契機となったのは単一の化石

標本ではなく、複数のタイプ標本になるような良質な化石標本であった。

タイプ 3「化石が直接開館の契機ではないミュージアム」は古生物学だけでなく、自然史分野や人文分野も広く扱っている特徴がある。また、学芸員や研究員数も 10 人を超えるような大規模館などでは、収蔵点数も多いため、複数の重要な標本が収蔵されているが、博物館設立の契機となる標本はない。例えば、自然史と人文を広く扱う北海道大学総合博物館には、1930 年代に発掘されたニッポノサウルスやデスモスチルスのような重要な標本があるが、大学全体が収集した大量の学術標本全体のなかで、ニッポノサウルスやデスモスチルスは核の一部となった。

(2) 古生物学者のかかわり方

(2) -1 設立前からの働きかけとチーム作り

ここからは、先にタイプ 1 と 2 に分類した「ミュージアム設立の契機となった化石があったミュージアム」に絞って、ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか考察する。文献調査による調査には偏りがある。少部数印刷のため地元でなければ読むことができない出版物もあり、全てを網羅して調査できたわけではないが、ミュージアムごとに公表されている出版物数にかなりの差が存在する可能性がある。そのため、記録量が豊富なミュージアムと古生物学者を中心に考察する。

タイプ 2 である足寄動物化石博物館は、設立前に調査をまとめた冊子が出版されている。また、開館前後にかかわった学芸員によって教育系の学術誌上で、経緯や実態やビジョンがまとめられており（澤村 1996, 2001, 2021）、特に情報量が豊富なミュージアムである。足寄動物化石博物館の化石は 1970 年代後半から 1980 年代前半にかけて多く発掘された。それらの化石に関わった研究者たちは、それらの価値を理解し、博物館設立を町民や行政に訴えた（澤村 1996）。例えば、1989 年の『足寄動物化石群研究の記録』では足寄には化石がまだまだ見つかるため発見、発掘のセンターとして

「“デスモスチルス博物館”が誕生し、世界中の人々とのつながり、交流が開かれることを心から期待しています」と松井愈教授（北海道大学）の言葉がある（北海道足寄町教育委員会 1989）。また『足寄動物化石群研究の記録』のなかでは、すでに町の理事者が博物館設立を進めることを想定していたこともインタビューのなかで知ることができる。町民による多くの寄稿文も含まれており、博物館設立への願いだけでなく、博物館と化石産地を結びつけることが重要といった考え方も見ることができる。このことから 1989 年以前にはすでに目指す方向性が町民、行政、研究者で共有できていた。その後、ロサンゼルス郡立自然史博物館の Lawrence Barnes 博士を 1992 年に招き、エティオケタスと呼ばれるヒゲクジラ化石の研究論文を 1995 年に共同で発表した。ここまでをまとめると、古生物学の研究者が 1998 年の開館にむけて町民や行政への働きかけをただけでなく、研究体制も組織化したことがわかる。

(2) -2 研究者の技能の貢献

次に「人」を中心としてミュージアム創設の要素をどのように作り出してきたか考察する。木村方一（北海道教育大学）は 1969 年の忠類ナウマンゾウ発掘から、足寄動物化石博物館、滝川市美術自然史館、沼田町化石館、北海道博物館（当時は開拓記念館）、深川市郷土資料館の化石発見、研究、ミュージアム設立に関わった研究者として重要である。詳細な経緯がわからないケースもある中で、幸いなことに木村は自伝的書籍を出版し（木村 2020）、北海道の古生物学をまとめた論文や書籍を出版し（木村 2003, 2023）、大学退職時にかつての学生たちによって出版された記念冊子があり（木村方一先生のご勇退を祝う会 2003）、木村の論文出版、学会発表、講演記録、新聞記事など長年の活動の全体像を詳しく知るだけでなく、様々な活動に対する木村の考えも知ることができる。資料が豊富に存在する木村方一を中心に考察したい。

古生物系ミュージアムの設立を考えると、研究

者は技能の提供で貢献してきた。具体的には化石発見、発掘とクリーニング、研究、博物館設立提言、教育普及などが挙げられる。これらについて詳しく見て、ミュージアム設立の要素を作り出した研究者の技能について考察していく。特に引用がない場合は、木村 (2020) から得られた考察である。

まず、化石の発見にかかわるスキルとは、化石の鑑定であり研究能力によって支えられている。木村の場合は北海道開拓記念館（当時）の研究者との繋がりによって化石に引き合わせてもらった記述もある（フカガワクジラとタキカワカイギュウがそのケースである）。また化石の寄贈については、化石所有者との交渉も必要なスキルであり、面会してもらえなかったこともあるが、何度も通って寄贈まで進めることができたエピソードも紹介されている。また、工事現場における化石発見の際には、交渉相手との利害関係を明らかにして、互いの利益が最大になるような妥協点を見出すエピソードもある。

次に、発掘とクリーニングにかかわる技能とは、チームづくりの能力である。特に、大規模な発掘は担当者を決めて分業するスキルが必要である。例えば、発掘チームで進展を共有し市民への普及教育も行う勉強会や、日々の進展を共有し一体感を作るだけでなく記録として残すこともできる印刷物を発掘期間中に逐一作成するなど、長期的展望をもって工夫している様子も紹介されている。

化石発掘の後のクリーニング作業も同様に工夫がみられる。クリーニングの技術は経験のある研究者（木村ら）から教えてもらいつつチームの技術として定着させていった様子が、タキカワカイギュウの事例で知ることができる（田中 2000）。つまり、具体的に現場の作業の経験と知識も必要とされる。また、人的コネクションを活用して、研究が必要な化石にあわせて研究者を海外から招き、化石発掘の教育普及を教諭に貢献してもらうなど（木村 2017）、仲間たちの特技をよく理解した上で適した役割を充てている。そして、化石の

学術的意義を行政に訴え、マスコミを通して発信するための研究とコミュニケーションの技術が重要であろう。例えば、忠類でのナウマンゾウ発掘は新聞で報道され、当時かなり話題になったようで、これによって道民の化石意識を高め1970年代の発掘につながったという記述もある。

研究を進めつつ、足寄町、滝川市、沼田町では化石の学問的重要性をプレスリリースしつつ、自治体の理事者に学術的な意義を報告し、博物館設立を提案するなどしている。これはどのような方向性が望ましいかといったビジョンをもっていたため提案することができたであろう。足寄町の場合、木村だけでなく足寄でかかわった研究者たちが博物館設立を提案していたことが澤村(1996)に記されている。同様に、発掘チームの運営も中心的役割を担っていたものの木村一人で行っていたわけではなくチームとして機能していた。

(2) -3 地域を超えた活動と経験の蓄積

上記では木村を中心に研究者の貢献を見てきたが、複数のミュージアム運営に関わった研究者としてはカイギュウ類の専門家である古沢仁(滝川市、沼田町、札幌市で学芸員として勤務した)、また深川市や滝川市の化石の発掘に多く参加し、沼田町のヌマタネズミイルカなどを発見・発掘し、中学校教諭を退職したのちは沼田町化石館に勤務した山下茂もいる。1978年のフカガワクジラの発掘と1980年タキワカイギュウの発掘の両方に参加した人も多かった(深川市と滝川市は隣接している)(木村2000)。上記に名をあげた方々のほかにも幾人もの鍵となる人物がいるし、記録には残りにくいケースもあるだろうが、横断的にミュージアムに関わった研究者やチームの活躍に気がつく。

地域ごとに個別にミュージアムが興ったのではなく、技能をもつ人々同士が地域を超えて繋がりチームとして機能することでミュージアムの設立が推し進められたことが見えてきた。木村や他の研究者たちは地域を横断してかかわっているため、ノウハウの蓄積があることが大きなメリットだったことに気がつく。様々な地域で協力や交渉

をとおして人々と繋がり、専門的な知識や経験を蓄積し、ミュージアム設立やその後も有機的な博物館活動を想定したビジョンをつくり、住民や自治体にメッセージを発信し博物館文化を醸成した。発見された化石を地元に残したいという思いが木村(2020)には繰り返し綴られている。これらのことから技能だけでなく、人々への敬意と地域に貢献したいという気持ちも様々な地域のミュージアム設立に繋げてきた要素であろう。

まとめ

本調査では北海道の脊椎動物化石の古生物系ミュージアム13館を、設立の契機となる化石の発見の有無、その研究成果発表時期、そして博物館設立や計画の時期を文献から調査した。その結果、設立の契機となる標本があったミュージアムにとって、ミュージアム設立以前の段階で、化石の専門家による自治体への働きかけが重要ということが強調された。研究成果が出る前の段階からミュージアム構想や仕組み、オープンに向けた組織づくりが課題で、そのような実践から構想までのノウハウをもった研究者が、地域を横断的に、かつ人々の間や組織の中で貢献していたことがミュージアム設立に繋がったと考えられる。

ミュージアムに関わる研究者にとっての技能とは、発掘やプレパレーションや研究といった実務能力のほか、ビジョンを作ること、人々に働きかけること、チームを作ることである。

最後に、本研究の限界についても述べておきたい。それは本稿で主張した傾向は、時代、地域、分野の制限のなかで見えたものであるということだ。バブル経済の崩壊と人口減少、昨今の物価高騰もあり、現代は1990年代前半以上にミュージアム設立のハードルは高くなっていることが、調査したミュージアムの設立時期との違いであろう。本研究で示されたように、研究発表前の段階において、研究者から行政へのミュージアム設立といった働きかけが重要であることは違いないが、しっかりと研究発表を行って学術的により強固に意義づけされた化石標本にすることが今後

の社会では重要になってくると思われる。この点は、今後の実践のなかで明らかにしたい。また、本稿では北海道という地域、そして筆者の専門分野である脊椎動物分野に絞って調査した。そのため、地域と分野の偏りがある。本調査で得られた考察をどれほど一般化できるかは北海道以外の地域での調査が必要であり、それによりミュージアムと化石標本と研究者との関わりを明らかにすることができるようになるだろう。

現在、水面下でミュージアム設立を検討している自治体やグループもあるだろう。本研究は上記のような限界もある調査であるが、本稿が現代と後世のミュージアム設立に少しでも役立てば嬉しい。

謝辞

本研究は文献調査であったが、調査前後に得た様々な情報が役立った。木村方一氏（北海道教育大）、澤村寛氏（足寄動物化石博物館）、古澤仁氏（札幌市博物館活動センター）、湯浅万紀子氏、小林快次氏（北海道大学総合博物館）、一島啓人氏（福井県立恐竜博物館）、添田雄二氏（幕別町、忠類ナウマンゾウ記念館）、百々千鶴氏（深川市教育委員会）、宮本雅通氏（今金町教育委員会）。大勢の方々と交流を持つことができたが、本調査にあたって特に上記のみなさまに御礼申し上げます。

引用文献

- Barnes, L. G., Kimura, M., Furusawa, H. & Sawamura, H. 1995. Classification and distribution of Oligocene Aetiocetidae (Mammalia; Cetacea; Mysticeti) from western North America and Japan. *Island Arc*, 3, 392–431.
- Caldwell, M. W., Konishi, T., Obata, I. & Muramoto, K. 2008. A new species of *Taniwhasaurus* (mosasauridae, Tylosaurinae) from the upper santonian-lower campanian (upper cretaceous) of Hokkaido, Japan. *Journal of Vertebrate Paleontology*, 28, 339–348.
- Furusawa, H. 1988. A New Species of Hydrodamaline Sirenina from Hokkaido, Japan. *Takikawa Museum of Art and Natural History*, Takikawa, Japan, 23 pp.
- Ichishima, H. & Kimura, M. 2000. A new fossil porpoise

(Cetacea: Delphinoidea: Phocoenidae) from the Early Pliocene Horokaoshirika Formation, Hokkaido, Japan. *Journal of Vertebrate Paleontology*, 20, 561–576.

Inuzuka, N. 2000. Primitive Late Oligocene desmostylians from Japan and phylogeny of the Desmostylia. *Bull. Ashoro Mus. Paleontol*, 1, 91–123.

Kobayashi, Y., Nishimura, T., Takasaki, R., Chiba, K., Fiorillo, A. R., Tanaka, K., Chinzorig, T., Sato, T. & Sakurai, K. 2019. A New Hadrosaurine (Dinosauria: Hadrosauridae) from the Marine Deposits of the Late Cretaceous Hakobuchi Formation, Yezo Group, Japan. *Scientific reports*, 9, 1–14.

Nakaya, H. 1989. Upper Cretaceous elasmosaurid (Reptilia, Plesiosauria) from Hobetsu, Hokkaido, northern Japan. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan*, 154, 96–114, doi: 10.14825/prpsj1935.1935.43.

Tanaka, Y., Furusawa, H. & Kimura, M. 2020. A new member of fossil balaenid (Mysticeti, Cetacea) from the early Pliocene of Hokkaido, Japan. *Royal Society Open Science*, 7, 1–20.

Tanaka, Y., Kimura, T., Shinmura, T., Ohira, H. & Furusawa, H. 2025. A new member of a large and archaic balaenid from the late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*, 28(2):a37, 1–58.

足寄町教育委員会. 1989 足寄動物化石群研究の記録. 北海道足寄町教育委員会, 201 pp.

糸魚川淳二. 1995 今金町立博物館（仮称）の展望. 今金地域研究, 1号, 1–6.

今金町. 2003 史跡ピリカ遺跡整備事業報告書. 今金町, 56 pp.

今金町. 2022 今金町文化財保存活用地域計画. 今金町, 101 pp.

越前谷宏紀, 田中嘉寛, 高崎竜司, 田中公教, 加藤誠, 小林快次. 2017 北大古生物学の巨人たち. 北海道大学出版会, 95 pp.

北広島市教育委員会. 2010 北広島市エコミュージアム構想. 北広島市教育委員会, 19 pp.

北広島市教育委員会. 2014 北広島遺産ハンドブック（自

- 然遺産編). 北広島市教育委員会, 31 pp.
- 木村方一. 2000 タキカワカイギュウと市民運動. 『20/5,000,000 年の記録』ータキカワカイギュウ発見 20 周年記念誌ー. 滝川市美術自然史館, 3-5.
- 木村方一. 2003 改訂版 太古の北海道ー化石博物館の楽しみ. 2nd ed. 北海道新聞社, 札幌, 207 pp.
- 木村方一. 2017 タキカワカイギュウ発見と研究・普及活動について. 北海道の文化, 89, 14-25.
- 木村方一. 2020 化石先生は夢を掘る. 北海道新聞社, 143 pp.
- 木村方一. 2023 北海道の脊椎動物化石発見と研究史. 北海道の文化, 95, 2-3.
- 木村方一先生のご勇退を祝う会. 2003 木村方一先生の教育研究のあゆみー北海道内産哺乳類化石発見の記録ー, 96 pp.
- 札幌市. 2011 第三次新まちづくり計画 概要. 札幌市, 48 pp.
- 札幌市. 2019 (仮称) 札幌博物館展示・事業基本計画. 札幌市, 38 pp.
- 札幌市博物館活動センター. 2007 札幌市大型動物化石総合調査報告書: サッポロカイギュウとその時代の解明.
- 澤村寛. 1996 足寄動物化石博物館 (仮称) の構想: 僻地の単科博物館の可能性. 地学教育と科学運動, 26, 43-46.
- 澤村寛. 2001 足寄地域の化石の研究と古生物学の普及. 地学教育と科学運動, 36, 13-16.
- 澤村寛. 2021 足寄動物化石博物館の実践ー僻地の単科博物館の科学運動. 地学教育と科学運動, 86, 55-63.
- 篠田謙一. 2024 科博と科学. 早川書房, 211 pp.
- 添田雄二. 2024 忠類ナウマン象記念館. 北海道絶滅動物館, 159
- 滝川市郷土館. 1983 滝川市郷土館研究年報. 滝川市郷土館, 65
- 滝川市美術自然史館. 2000 『20/5,000,000 年の記録』ータキカワカイギュウ発見 20 周年記念誌ー. 滝川市美術自然史館, 72 pp.
- 田中三郎. 2000 教員とクリーニング作業. 『20/5,000,000 年の記録』ータキカワカイギュウ発見 20 周年記念誌ー. 滝川市美術自然史館, 24-25.
- 田中嘉寛. 2024 札幌市の博物館計画のこれまでとこれから 札幌市産セミクジラ化石にかかる期待. 博物館研究, 59, 32-35.
- 西村智弘. 2024 北海道むかわ町穂別の古生物学史. むかわ町穂別博物館研究報告, 39 号, 1-14.
- 日本博物館協会. 2020 日本の博物館総合調査報告., 355 pp.
- 沼田町化石館. 2000 沼田町化石館年報. 沼田町化石館, 22 pp.
- 沼田町化石館. 2001 沼田町化石館年報. 沼田町化石館, 22 pp.
- 沼田化石研究会. 1991 沼田化石研究会 10 周年記念誌 軌跡. 沼田化石研究会, 26 pp.
- 疋田吉識・早坂克章. 2005 中川エコミュージアムの目指すもの. ほっかいどう政策研究, 15 号, 68-75.
- 美利河海牛化石調査研究会・今金町教育委員会. 1992 美利河海牛化石発掘調査報告書. 今金町, 133 pp.
- フカガワクジラ発掘調査団. 1982 深川産クジラ化石発掘調査報告書. 深川市教育委員会発行, 札幌, 133 pp.
- 深川市教育委員会. 2023 ふかがわ歴史の旅. 深川市教育委員会, 49 pp.
- 古沢仁. 1982 ” 滝川海牛 ” の発見. 北海道の文化, 54, 24-33.
- 古沢仁. 1989 タキカワカイギュウの研究. 滝川市, 81 pp.
- 古沢仁. 2013 海牛の大型化に関する考察. 化石研究会会誌, 45, 55-60.
- 北海道. 2010 北海道博物館基本計画 北海道開拓記念館のリニューアルから 北海道ミュージアムへ. 北海道, 17 pp.
- 北海道大学総合博物館. 2023 北海道大学総合博物館年報 R5. 北海道大学総合博物館, 96 pp.
- 北海道博物館. 2016 ビジュアル北海道博物館. 北海道博物館, 北海道, 120 pp.
- 幕別町教育委員会. 2025 忠類ナウマン象記念館 HP.
- 三笠市立博物館. 1999 20 年のあゆみ 1979-1999. 三笠市立博物館, 39 pp.
- むかわ町穂別博物館. 2021 むかわ町穂別博物館館報. むかわ町穂別博物館, 38 pp.
- 望月直, 高木榮一, 疋田吉識. 2006 北海道中川地域の上 部白亜系から産出した長頸竜類化石. 化石, 80, 1-2.
- 矢島睿. 1996 資料の収集. ミュージアムマネジメント 博物館運営の方法と実践. 東京堂出版, 166-173.